

特集2

2025年 第16回

高校生の 建築甲子園



テーマ **地域の暮らし** —— 地域に根ざした新しい和室を持つ戸建の住まい

主催 公益社団法人 日本建築士会連合会
都道府県建築士会

後援 公益社団法人 全国工業高等学校長協会
国土交通省、一般社団法人 日本建築学会

協賛企業 株式会社 総合資格〈総合資格学院〉
ステッドラー日本株式会社

建築甲子園全国選手権大会 審査委員会

審査委員長 横内 敏人 (横内敏人建築設計事務所代表)

審査委員 田中 隆司 (教育・事業本委員会委員長)

吉田 浩司 (青年委員会委員長)

石貫 方子 (女性委員会委員長)

清水 耕一郎 (まちづくり委員会委員長)

総評 横内 敏人 審査委員長

2025年度建築甲子園に御参加いただいた高校生の皆さん、本当にありがとうございました。見ごたえのある内容の作品ばかりで、興味深く拝見し、審査をさせていただきました。

今回のテーマは地域に根ざした新しい和室を持つ戸建の住まいというものでした。これは前審査委員長で2024年度の審査終了後に急逝された建築家の堀啓二さんが出題されたもので、私とその審査を引き継ぐことになりました。堀さんは人間的スケール感を大切にされる方で、日本の伝統建築にも造詣が深いので和室が持つ人にやさしく、肌ざわりの良い空間の質をどのような現代的形で再構築するかが出題の意図だったと考えました。また現代の住まいには急速に和室がなくなりつつありますが、そのことに対する危機感もこの出題の背景にあったように思います。

そのような時代の変化の中で、今回参加していただいた高校生の諸君にとっても和室はどこか遠い存在になりつつあり、案を作るのが難しかったのかも知れません。しかし、集った応募作品を見るとどの作品にも伝統的な和

室が持つさまざまな良さをよく理解しつつ、創意にあふれた提案が多く見られたことに大変うれしく思ったのが全体の感想です。

特に最終審査に残った13案はどれも提案がオリジナリティにあふれ、設計密度も高く、プレゼンテーションも明快でわかりやすいものばかりでした。そんな中、優勝した群馬県立桐生工業高校の「坂口安吾に馳せる続・墮落の間」という作品は、地元が輩出した作家坂口安吾の文学の本質を深く学び、墮落というキーワードと畳に横になって本を読んだり物想いにふけるという行為にむすびつけ、それを彼が暮らした木造家屋の復元という形で提案したアイデアが斬新で、観念的にならず、具体的な密度ある提案となっていたことが、すべての審査員から高い評価を得ました。

他にも準優勝となった石川工業高等専門学校の案も、地域性と現代性が融合した見事な案でしたし、他の案もそれぞれに個性あるものばかりでした。

最後に、このコンペに参加したことを通じて、和室の持つ魅力に再び興味を持ち、将来のキャリアの中で和室の新たなあり方について提案いただけることを期待して総評といたします。

